講演録

ゴルフに必要な人間力

2012年度 FUJITSUファミリ会 秋季大会 記念講演

有限会社大北ゴルフ練習場 ティーチングプロ **宮里 優** 氏

みやざとまさる 1946年沖縄県東村生まれ。1965年辺土名高等学校卒業。1970年立法院議員秘書。1972年沖縄県労働商工部勤務。1979年東村教育委員会勤務。1991年同委員会退職。1994年日本ティーチングプロゴルフ協会員。1999年4月名桜大学非常勤講師。2007年10月国立大学法人琉球大学非常勤講師。2002年4月ゴルフダイジェストより「ベストオブザイヤー特別賞」受賞。2005年6月「ベスト・ファーザー イエローリボン賞」受賞。『宮里流 ゴルフ子育て法 学校一番、ゴルフ二番』『沖縄発ゴルフ世界流』など著書多数。

「信念」は生きる力の源

私は今年で66歳になりましたが、これまでの人生で得たことは、生きるためには「信念」が必要だということです。私が思う信念とは3つあり、一つは、どのような境遇にあっても「夢」を持つこと。一人ひとりが自分の夢を実現するために、生涯をかけて頑張ることが生きる原動力になるのではないかと思います。二つ目は、「誇り」を持つこと。どのような状況でも決して誇りを捨ててはいけない。自分の誇りにかけて人生を歩んでいくことが生きるための大きな力になるのです。そして、最後の一つは、「努力」です。人間の運命というものは、自分の努力だけではどうにもできないこともたくさんあります。しかし、可能な限り、死力を尽くして自分の全うすべき道を進んでいく。それが生きる力になると信じています。

私はゴルフにおいては、大変な努力を重ねた一人であると自負しております。死にもの狂いで練習をした経験があるのです。

毎朝出勤前に1時間、昼は昼食を抜いてパットの練習。仕事が終わった夕方からはアイアン、日が暮れてボールが見えなくなったら、10時くらいまで夜間練習場でドライバー。さらに、音が周りに響かず、深夜まで練習できる場所に移動し、パターやアプローチ。そこもいよいよ消灯になると、最後はテラスにあるグリーンで、午前4時くらいまで。実に1日10時間から12時間くらいは練習をしたと思います。

私がこのような無茶な練習をしたのは、同僚の一人が言った、「宮里にはゴルフなんて無理だ」という発言に、プライドが大変傷つけられたからでした。私は自分自身の誇りを取り戻すため、絶対に彼を見返してやろうと思ったのです。そして半年後、ついにゴルフで彼に勝つことができました。

子育てはまず「夢」を持たせること

私は、3人の子供たちをプロゴルファーに育てました。子育てで大切なことは、「夢」を持たせることだと思います。長男の聖志は3歳からゴルフを始めました。練習場に連れて行くと、3歳でも周囲の大人を見て、見よう見まねでボールを打つようになります。父親の趣味につき合っているうちに、どんどん上手になって、中学生の頃にはかなり力がついてきました。そして将来は、「プロゴルファーになりたい」と言い出しました。私もゴルフでは相当努力をしてきましたが、その私から見てもプロになるということは夢のような話、現実には考えられない職業でした。そうかと言って私には、子供たちに猛勉強をさせて一流大学に行かせるような自信もありません。それならば、ゴルフを頑張らせてゴルフの強い大学に行かせよう。そうすれば、ゴルフ関係の仕事に就けるだろうと考えて、長男の夢を応援することにしました。

高校では1年からレギュラーになり、全国大会でも活躍するようになりました。そして学業の真面目さも認められ、近畿大学に授業料免除の特待生として入学することができました。予定通り、ゴルフで大学まで行く道が開けたのです。しかし、ほっとしたのもつかの間、大学2年生で遊ぶことを覚えた長男は、ゴルフの練習をさぼり、大学に行かなくなってしまいました。

一方、私はその頃、自分自身の夢をかなえるため、村長選挙に立候補したのです。しかし、結果は落選。そうなると、小さな村はしがらみの多いところですから、新たに就職先を見つけることが非常に難しく、2年間も仕事がない厳しい生活をしておりました。このような状況で大学から、「ゴルフも勉強もしていない長男の特待生としての扱いを取り消すので授業料を払ってほしい」という通達があったのです。

私は長男に、大学を辞めて沖縄に戻り、研修生として2年間、夢だったプロゴルファーへの道をもう一度目指すように説得しました。すると彼も一大決心をして、頑張ってくれたのです。そして、約束の2年後、無事プロテストに合格することができました。長男にここまでさせたのは、実は彼がプロなることを諦めきれない理由が私自身にあったからです。それは、高校生のときに出場した世界ジュニア選手権で、聖志がジュニアのチャンピオンよりも高い球を打ったことでした。それを見たときに、もしかしたらプロになれるかもしれないと、私はほのかな希望を抱いたのです。プロテストに通ったときには、今までの苦労が本当に報われた思いでした。

ゴルファーに大切な「人間性」

非常に大らかな性格の長男とは違って、次男の優作は完璧主義です。頑固で、自分が納得するまできっちりやらないと気が済みません。独立心が強く、プロになってからは、親に教わるのは格好悪いと、私のアドバイスを拒むようになってしまいました。最近になってようやく、自分も親になり、親のありがたみがわかってきたようで、私の話を少しは聞いてくれるようになりました。

優作は、高校生のときに日本代表として参加した世界大会で優勝しました。その大会の後、私は関係者から一通の手紙をもらったのです。そこには、優作のプレーがすばらしかったという賞賛とともに、彼の誠意に強く感銘を受けたこと、これからゴルフを始める子供たちも、技術ばかりでなく、優作のように人間性、マナーも学んでいってほしいといったことが書いてありました。一人のゴルファーの優勝に対して、ここまで誉めてくれることをそのときは不思議に思いましたが、後になって、その理由がわかりました。優作は、大会の翌朝に役員の方々が帰ることを知り、午前5時前から彼らの荷物運びを手伝い、丁寧にお礼を述べて見送りをしたそうです。その態度に感激した役員の方が、この手紙を送ってくださったのです。

確かに私はこれまで、親として、指導者として、「ゴルフよりも、まず人間性が大事」「いいゴルファーである前に、いい人間であれ」ということをずっと言い続けてきました。マナーが悪ければ、殴ってでも徹底的に教えてきました。ですから、この世界大会でのできごとは、息子が優勝したことはもちろんですが、私にとっては、彼の人間としての成長を知ることができた何よりも嬉しい経験でした。

子供の力を信じて世界へ挑戦

娘の藍は、小さい頃はピアノの先生にするつもりでした。ところが、父親、兄2人と、ゴルフ一色の家庭環境から、彼女もまたゴルフに専念するようになりました。そして、将来はプロになりたいという希望を持つようになりました。当時は、女子プロゴルファーに対しての社会的な評価は低く、夢を現実的に描くことは難しかったのですが、本人は、それでも夢を持って練習していました。最初にコースに出たのは、小学1年生のとき。2年生の頃には、一人前のスイングができるようになっていました。

中学1年生のときに九州大会の予選が沖縄でありました。毎年九州大会には、沖縄からは3名行くことができたので安心していたのですが、その年は中学生と高校生をあわせて1名しか行くことができないという通達がありました。中学1年生から九州大会、そして全国大会へという夢を持っていた藍は、2打足りなく予選で落ちてしまいました。私は、体力的にも技術的にも差がある中学生と高校生からたった1名というのは、システムに問題がある、日本には、ジュニアを育てるシステムができていないと憤りました。そして、「日本がだめなら世界に行こう」と藍に言ったのです。幸い、小学生のときの実績が認められて、世界ジュニア選手権大会本部から参加してもよいとの返事をいただき、旅費は借金をして、中学生程度の英語力しかないまま、2人でアメリカに旅立つことになりました。

こんな状況でしたが、2日間の大会が終わってみると、なんと5位に入賞することができました。小学生のときには、とてもかなわなかった海外選手と同じ組になりましたが、藍ははるかに彼女より強くなっていました。私は、アメリカに行って本当によかったと思いました。九州大会にも行けなかった女の子が、世界で戦ってみたら5位になれた。そういう子が沖縄にはいるのだと、堂々と胸を張って言えるようになったのです。

帰国後、初めて出場した全国大会で優勝したときに、彼女はあらためて、「私の夢はプロゴルファーになること。それも、世界の舞台で活躍できる一流のプレーヤーになること」と宣言しました。そして、全国大会での優勝には、アメリカでの経験が役立っていたことを語りました。落ち込んだときにも夢に向かって前進する勇気と努力が、大きな自信につながります。アメリカ遠征で培った自信が、彼女の大きな原動力になったのです。

「静筋」を鍛えて「人間力」を磨く

私は、ゴルフには、「技術」と「精神力」が必要だと思っております。体を動かす筋肉である動筋（どうきん）を鍛えて技術を磨くことはもちろんですが、勝つためには、精神面を強化することがさらに大切です。その精神力を磨くものを私は、「静筋（じょうきん）」と名づけました。これは、目に見える筋肉ではなく、冷静な判断力を司る心の筋肉です。

ゴルフは非常にメンタルなスポーツですから、どのような状況でもプレッシャーに負けることなく、冷静な判断をすることが重要です。練習で培った技術を思う存分発揮するためには、静筋を持たなければなりません。静筋は、精神を統一して静かに本を読んだり、音楽を聴いたりすることで鍛えられます。芸術活動は、イマジネーションを豊かにしますので、リラックスしたり、自分自身をコントロールしたりすることに役立ちます。さらに、人と話をして知性や教養を身につけることも、心を磨く方法です。

私の子供たちは、将来プロになるという夢を持ち続けて努力し、幸い、その夢をかなえることができました。しかし、プロゴルファーに最終的に必要なものは、思いやりや知性、教養を含めた「人間力」です。その力がより高いレベルにある選手が強くなるのです。藍は今年、「ウィリアム＆モージー・パウエル賞」を日本人で初めて受賞いたしました。この賞は、プレーだけでなく、人間性も含め、あらゆる面で模範となるゴルフ選手に贈られる賞です。これはひとえに、今までの彼女の努力の賜物だと思います。そして娘だけでなくすべてのプレーヤーが、人生を終わるときに、すばらしい人間であったと評価される「人間力」を持ったゴルファーになってほしいと願っています。